

序

ある若者

ひとりの少年とひとりの少女が立っている
お前たちにもやがて分かる時が来るだろうか

^{ひかり}陽光に満ちた街を去る^{わけ}理由が

「それはね、陽光を守るためさ、たぶん」と言う僕を
お前たちは不思議そうに見つめていた
その愛らしい瞳を曇らせる何者かの渦の中へ僕は発つ

そいつらを蹴散らしてしまおうとは思わないさ
ただお前たちがいつかそれにぶつかった時
苦しみの中でも微かな陽光が見えるようにしたい

「もう、お話をしてくれる人が居ないわ」と少女は言う
生きて、そしてお歩き、ぶつかって、そして転んで
お話なんかよりもっと大きなものに出会おうだろう

「また帰ってきてくれるよね」と少年は言う
そうとも、お前たちを忘れた時が僕の敗れ時さ
この次逢う時に、お前たちはどんなに大きくなっているだろう

四つの瞳が見送っている、光溢れる街を僕は後にする
頑なな拒否に身を固めた暗い抒情の世界へ
鋭いものがぶつかり合う激しい情念の世界へ
お前たちの素直さと美しさと楽しさをそっと植えるために

(1984.7.8～15)